現地から問い直すイラン

東京大学法学部 3 年　松香怜央

1. イランを日本で問う

イマーム・ホメイニー国際空港に降り立った日のテヘランは，厚着をした私たちの予想に反して、すでに春めいていた．朗らかな歓迎ののち，クレジットカードは使えないからと，すぐに空港内の両替所に向かった．先に両替を済ませた友人たちが，両手で抱えるほどの札束を受け取っていたのが，後方に並んだ私の目に入った．すっかり怖気づいてしまった私はずっと少額を差し出したが，それでも大量の紙幣が用意された．受け取った三束の札束を手にし，乾燥帯特有の雲ひとつない陽気のなかで，私は胸を高鳴らせていた．

この胸の高鳴りは，初めて手にした札束の感触のみによるものではなかった．私は，企業の法社会学に主たる関心を置くなかで，アメリカ合衆国による経済制裁——特にトランプ政権が核合意から離脱して以降の Maximum Pressure——が，どのようにイランに影響を及ぼしているかという問いに関心をもち，本研修に参加した．そして，空港の両替所での顛末は，早速その一端を私に垣間見せてくれたと思ったのであった．なお本所感は、執筆者個人の見解である。

2. イランを現地から問い直す

移動の疲れが若干残る旅程の 2 日目，私たちは国際関係学院（School of International Relations; SIR）に赴き，３名の SIR 教員による講義を拝聴した．私の場合，特に Dr. Shahabi の「イランの経済」に惹かれた．冒頭，彼はイラン経済の抱える問題点として，（１）経済制裁，（２）60 年間の構造的な問題，（３）政策論議における軽視の三つを挙げた．

しかし，その後の豊富な経済指標を用いた概説から見えてきたのは，むしろイラン経済の強かさであった．人びとは銀行不信に陥っていない．石油以外の産品の輸出は好調である．公債についても財政危機に陥るレベルではない……．目下のインフレーションは社会構造上の問題であり，経済的な解決は不可能であると説いて，Dr. Shahabi は講義を締め括った．そして私は，両替所における自らの早合点に気づかされることとなった．

とはいえ，インフレの過酷さについては，後日に訪問したイラン中央銀行（Central Bank of Iran; CBI）で実感させられた．CBI によれば，2022 年 1 月から 2023 年 1 月にかけてのインフレ率は 41.8%であり，さらに，物価の上昇に対して，所得の上昇が追いついていないとのことであった．後者について，日本でも同様の状況にあるのではないかとコメントをしたところ，「One digit, or two digits?」と尋ねられた．私は咄嗟に質問の意図を理解できずに戸惑ってしまったが，続く説明を聴いていくと「日本のインフレ率は，一桁か，それとも二桁か」ということであった．このような問いかけが成立すること自体に，驚きを隠せなかった．

経済制裁だけではない，複合的かつ不明瞭な原因からなる過酷なインフレについては、SIR でも，CBI でも，そのような話を伺うことができた．しかしながら，経済制裁にもかかわらず，輸

出入ともに貿易が活発であることも伺った．このことは，私の心に引っかかり続けていた．

そしてその一端を、急遽として訪れた経済協力機構（Economic Cooperation Organization; ECO）で垣間見ることができた．ECO は，イラン・トルコ・パキスタンを原加盟国とし，現在は 10 カ国からなる地域経済協力体制であり，パフラヴィー朝時代からの歴史を有する．そこには，非農産品を中心とした貿易の自由化，そして学術や文化，教育といった分野での協力関係の構築に向けて，主導的な役割を果たそうとするイランの地域大国としての一側面があった．このとき，米国，さらにいえば西洋諸国との関係だけに注目していては，イランを見誤ってしまうのではないか，と思い始めていた．

テヘラン滞在の最終日に訪れた Governance & Policy Think Tank で自由に議論をする場が設けられ，イランにおける女性の地位が議題に上がった．そこで「イランは女性の地位改善について西洋諸国に遅れをとっている．しかしイランにおける女性の地位は，近隣で活動するターリバーンや IS に比べればマシである．」といった発言が飛び出した．誤解を恐れずにいえば，これは不適切な比較対象によるエクスキューズだと思ったし，今もその考えはあまり変わらない．

しかし周知のとおり，イランはターリバーンが実質的に政権を担うアフガニスタンや，IS が活発に活動してきたイラクなどと国境を接しており，それらの国々との人の往来も活発である．私たちの感覚からすれば，ターリバーンや IS は批判の対象にこそなれ，比較の対象にはならない．しかしながら，その発言者はイランとそれらを比較することで，自国のありえたかもしれない姿として，ターリバーンや IS を見ているのではないか．「海外」として想定する国家やアクター，そしてその照り返しである自国としてのイランの理解に，自らの想像力の限界を感じざるを得なかった．テヘラン滞在の最終日に，イランを問い直す契機となる僥倖が訪れた．

3. 跋

冒頭にも記したように，米国の対イラン経済制裁に関心をもって，私は本研修に参加した．しかし上述した一連の出来事によって，その問いだけでは，イランを見るための豊穣な視角が狭まってしまうことが明らかになった．そして，経済制裁だけではなく経済政策や社会構造まで含めて，対米関係という視点を越えてイラン人の自己像まで含めて問いを立てることの豊穣さに気がつくことができた．ささやかなことではあるが，ここを出発点として考究を進めていきたい．

本研修は，総じて極めて充実していた．紙幅の関係上，触れることのできなかった事柄も多い．とりわけテヘランを発って以降に訪れたエスファハーンやヴァルザネ，カーシャーンについて記すことがかなわなかったが，そのいずれにおいても得難い経験をした．私の関心からすれば，イランに進出している多国籍企業の方に話を伺いたかったところではあるが，望蜀にすぎない．

勉強不足を恥じ入ることや，自らの曖昧な態度に嫌気が差すことも多かった．ロシアによるウクライナ侵攻について，明確に反ウクライナ的な主張を聴いたときは，予想していたにもかかわらず，面喰らって口籠もってしまった．侃侃諤諤，議論するべきであったし，なによりも私は反論するべきであった．ほかにも議論したかったこと，深く掘り下げて訊きたかったことを挙げれば，枚挙にいとまがない．そのいずれもが，今後の課題となる．